

Title	記憶はなぜ哲学の問題になるのか
Sub Title	Why does memory matter to philosophy?
Author	平井, 靖史(Hirai, Yasushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2024
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.153 (2024. 3) ,p.25- 52
JaLC DOI	
Abstract	<p>The aim of this paper is twofold. The first is to propose taking memory not merely as a specialized field but as a framework for recontextualizing philosophical issues in human phenomena. This will, in turn, allow scholars to redefine the multifaceted forms of memory based on their underlying temporal structure. This redefinition is expected to supplement the conceptually underdeveloped areas in current classifications and foster a more organic understanding of their interrelations.</p> <p>The second objective is to address the issue of pastness as an example of an inquiry based on this methodological vision. From the historical tradition of philosophy, I extract the Past Endogeneity Principle, which posits that the pastness can only be derived from the process of recollection itself. This principle is shown to be a crucial guiding thread in the investigation of the universal origin of pastness. Next, returning to contemporary debates, I critically examine four existing positions within the context of memory and pastness, particularly focusing on the metacognitive view, which is becoming increasingly influential. While pastness has traditionally been discussed as an issue inherent to episodic memory, I argue for its relevance to recognition as well, leading to the derivation of two types of pastness. Additionally, I point out the inadequacies in the treatment of serial time attributed to the feeling of pastness and highlight the need for a reexamination from the perspective of the philosophy of time. The inquiry throughout the paper progresses by cross-referencing historical philosophy, contemporary analytic discussions, and empirical scientific findings.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

平 井 靖 史*

Why Does Memory Matter to Philosophy?

Yasushi Hirai

The aim of this paper is twofold. The first is to propose taking memory not merely as a specialized field but as a framework for recontextualizing philosophical issues in human phenomena. This will, in turn, allow scholars to redefine the multifaceted forms of memory based on their underlying temporal structure. This redefinition is expected to supplement the conceptually underdeveloped areas in current classifications and foster a more organic understanding of their interrelations.

The second objective is to address the issue of pastness as an example of an inquiry based on this methodological vision. From the historical tradition of philosophy, I extract the Past Endogeneity Principle, which posits that the pastness can only be derived from the process of recollection itself. This principle is shown to be a crucial guiding thread in the investigation of the universal origin of pastness. Next, returning to contemporary debates, I critically examine four existing positions within the context of memory and pastness, particularly focusing on the metacognitive view, which is becoming increasingly influential. While pastness has traditionally been discussed as an issue inherent to episodic memory, I argue for its relevance to recognition as well, leading to the derivation of two types of pastness. Additionally, I point out the inadequacies in the treatment of serial time attributed to the feeling of pastness and highlight the need for a reexamination from the perspective of the philosophy of time. The inquiry throughout the paper progresses by cross-referencing historical philosophy, contemporary analytic discussions, and empirical scientific findings.

* 慶應義塾大学文学部哲学専攻教授

はじめに

本稿はまず記憶を、人間事象を捉える一般的な枠組みとして用いること——その意味での記憶の哲学という構想——を提案し、ついでその構想のもとで、過去性の発生論的起源の問題を論じる。

これまでの哲学の歴史で記憶が課題として取り上げられたことがなかったわけではない。プラトンの想起説は彼のイデアの教理において中心的な役割を果たし、ロックが人の同一性を問いとして定式化した時にも記憶が取り上げられた。アリストテレス、アウグスティヌス、フッサールにも、興味深い記憶の理説を見出すことができる。なかでもバルクソンは、生理学から形而上学にまたがる視野のもとで、認知、時間、自由、心身問題、進化、創造性などの諸問題を解く鍵として、記憶の問題を大きく取り上げている。

他方で、哲学史研究から、現代の分析哲学と呼ばれる領域に目を移せば、記憶の哲学が急激な成長と発展を遂げている。その台風の目となっているのは記憶の哲学センター所長であるクルケン・ミカエリアンであり、彼の唱えるシミュレーション説である。そこでは、保存という性格が記憶にとって不可欠かという問いが論じられている。エピソード想起の主たる機能が、過去をただ眺め返すことよりもむしろ、未来への具体的な対処を可能にすることであるのだとすれば、それが事実的な意味で過去の情報を保存していることは必ずしも本質的ではなくなる。これを起点に、保存主義と生成主義、非連続主義と連続主義など、活発な議論が交わされている。Fernández 2019 は彼の考える記憶の哲学の中心的な問いとして以下の四つを掲げている。①認識論からくる形而上学的な問い、②記憶の志向対象をめぐる問い、③現象性にかんする問い、④正当化の問題。

記憶はまた、狭義の哲学研究を超えた議論をも巻き起こしてきた。戦時下や大量虐殺のような極限状況において記憶の倫理的働きが焦点化されたり、急速に進むテクノロジー的文脈の中で、生理的条件を前提とした記

憶像の変容が問われたりすることもある。

以上のような個別的な論点は今後も深められるであろうし、その価値があることを私は否定するつもりもない。だが、本稿で私が注意を喚起したいのは、記憶の哲学は、こうした個別の重要な問題を含むだけでなく、また、知覚の哲学や心の哲学と同列に並ぶ一ジャンルであるだけでなく、認識・身体・思考にまたがる全人的諸現象を包括的に思考するための「枠組み」を提供しようという点である。

1. 「枠組み」としての記憶の哲学

記憶は、エピソード記憶以外にも様々な様態を持つことが知られている。その及ぶ時間的延長によって感覚記憶、短期記憶、長期記憶に分類され、長期記憶はさらにエピソード記憶、意味記憶、手続き型記憶、プライミング、展望記憶などと分類される。こうした分類は、主に認知心理学の文脈で、半ば操作的になされてきた経緯があり、論者によって細部が異なり、厳密な概念的規定や、相互連関についての哲学的な掘り下げは十分とは言い難い現状にある。

だが確実に言えることは、エピソード記憶だけが記憶ではない、ということだ。哲学史におけるこの記憶の扱いの偏向を考えると、この点はいくら強調しても足りない。長期記憶のうち、大まかには意味記憶はいわゆる「知識」に相当し、手続き記憶はいわゆる「技能」に相当する。そして言うまでもなく、いずれも人間理解において決定的に重要なファクターである。そして現実には、これらの記憶は生理学的基盤において独立でないことがわかってきている (De Brigard et al. 2022, Jordão and St Jacques 2022)。だがそれらの働きの相互連関については、哲学の寄与しうる余地が多く残されている。

他方で、人間、ないし生物全般の振る舞いの基本的な部分は、記憶の言葉で捉え直すことができる。われわれの日常は知覚に基づいて、何か行動

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

を取ったり、あるいは立ち止まって思索に耽ったりすることで営まれている。そこで便宜上、ざっくり人間のことを知覚-思考-行動の三要素からなるものと考えてみよう。行動は手続き記憶によって構成されており、思考にはオブジェクトの記憶や意味記憶やエピソード記憶が用いられる。知覚-思考-行動は一定の時間を要し、オンタイムの情報処理はワーキングメモリを駆使して行われる。

ここで、知覚については同じように記憶化できないと考える人がいるかもしれない。この点は、「記憶の哲学」を「知覚の哲学」に対して二次的なものとみる哲学において伝統的な「偏見」と関わりがある。しかし記憶は知覚の単なる派生物ではない。実際にはむしろ、通常の意味での知覚は、記憶なしには成り立たないのである。

記憶が知覚を構成する

記憶は、知覚経験の形成に内在的に、少なくとも三重の仕方で関与している。これを「知覚内在的な記憶」と私が呼ぶのは、知覚経験を出発点としてそこから何かを連想するという事後的な場面での記憶の関与からこれを区別するためである。知覚内在的な記憶は、以下の三点から立体的に考察されることができる。

まず心理学の文脈では、「プライミング」という現象が知られており実験的にも多くの事実がわかっている。これを司る「知覚表象システム Perceptual Representation System: PRS」を、シャクターとタルヴィングはエピソード記憶、意味記憶、手続き記憶、ワーキングメモリに並ぶシステムとして掲げている (Schacter & Tulving 1994, Schacter, Wagner, & Buchner 2000)¹⁾。プライミングとは、先行刺激によって現在の知覚判断が影響を受ける現象を指す。例えば、ある特定の単語を事前に聞いていると、一定時間後にその単語に対する反応が早くなることが知られている。これは記憶の活性がオン/オフのデジタルではなく、一定の長さのテールをもつ

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

を「うまく地図化されていない領域 the poorly mapped territories」と巧みに形容している。これと同じ類の「イメージ」が知覚の場面で作動していると想定することができる。というのも、オブジェクトの記憶として思い出しているのは、知覚の場面でイメージとして捉えているものだと考えられるからである。そしてもちろん、このイメージは、生得的なものでない限り、記憶である。

第三に、「特徴抽出」の働きがある。例えば視覚において、人の脳は眼球から送られてきた情報のなかから点や線、それらのなす分布や形状の特徴を適切に抽出できるようになるために一定の訓練が必要であることが知られている。生まれたばかりの乳児は、目を開くことができはいても、事物に適切に焦点を合わせたり空間を把握することはできない。与えられた視覚信号のなかから、空間や事物の特徴を切り出すこと自体、無数の反復を通じて「覚えられた」ものである。実践の反復から特定のパターンを抽出するという挙動に注目すれば、それは手続き記憶と共通点を持つ。

この特徴抽出プロセスは、上に触れた概念／イメージの適用と混同されてはならない。大量にある手持ちの概念／イメージのどれを適用するかを決めるために、知覚刺激に対する特徴抽出が必要なのである。外国語のリスニングができるまでのプロセスを考えれば、納得することができるだろう。ある単語の音イメージを単独で形成できていることと、実際の会話聴取の中でそれを判定できることは別である。現に、病理学において、前者を明確に保持しており脳裏に浮かべることができるにもかかわらず、後者ができない、つまり目の前にあるそれを同定できない失認の存在が知られている³⁾。

以上をまとめると、こうなる。我々がただ目の前の対象を見聞きするという知覚経験の場面において、記憶は三種類の仕方で紹介している。感覚器官から入力されたものに対して、適切な仕方ですべて「特徴抽出」が施され、それによって適切に選別された「概念／イメージ」が組み込まれる。こう

したプロセス全体に対して、先行する意味ネットワークの活性拡散が影響するのが「プライミング／PRS」である。これらは知覚に対して後からつけ加わる偶有的な要素ではなく、ある種の知覚を知覚として成立させる、内在的・構成的要素である。

人間を記憶の多元的複合体としてみる

かくして、記憶の多元性を踏まえて眺め直してみれば、知覚-思考-行動の三重体としての人間ないし生物の振る舞いは、さまざまな種類の記憶によって複合的に構成されたものと見ることができることがわかる。つまり、従来、「知覚の哲学」や「行為の哲学」、「認識論」や「身体論」と名付けられて別々に扱われてきた哲学の諸部門は、記憶の哲学というより包括的な枠組みの中で、位置づけ直されることができるといえる。

これが、私が提案する、「枠組み」としての記憶哲学という考えである。

それでどうしたのかと訝しむ人がいるかもしれない。これは既存の諸問題を、記憶というラベルのついた同じ数の箱へと、ただ単に移し換えただけではないか、と。しかしそうではない。記憶哲学によって枠づけることには、以下の二つのメリットがある。しかも、それらのメリットは記憶の哲学と記憶の経験科学にとって双方向的である。一つは、哲学におけるエピソード記憶への極端な偏向を適正化し、諸記憶の相互連関を新たな仕方
で文脈化できること、もう一つは、**時間的組織化**という観点を導入できることである。この営みにより既存の記憶分類はより体系的に組織し直され、哲学の諸部門は新たな連携可能性をもつことが可能になる。

一つ目に関連して、哲学はエピソード以外の記憶について多くを学ぶことができるが、他方で例えばライルの knowing that と knowing how の区別のように、記憶というタームのもとで定式化されてこなかった知見が、異なる記憶様式（この場合は意味記憶と手続き記憶）間の関係として再定式化することができるようになる。あるいは、知覚と行動の相互連関につい

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

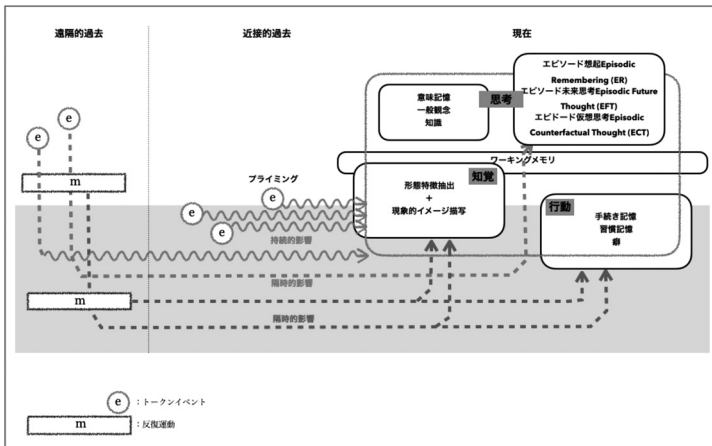


図1 諸記憶の時間的組織化

て考える際に、伝統的なやり方に加えて、例えばプライミングと手続き記憶に関する経験的知見を接続できることなどが挙げられる。

二つ目については少し詳しい説明が必要かもしれない。時間的「組織化」ということで、私は単に保存の期間長（現状の分類における感覚記憶／短期記憶／長期記憶はこれである）ではないものを意味している（図1参照）。五週間に及ぶプライミングと五週間前のエピソード記憶とでは、単純に期間長で言えば同じであるにしても、前者は（漸減する）持続的影響であるのに対して、後者は潜伏期間を経ての隔時的影響であるという違いがある。いずれも記憶の起点は過去のある時点であるが、前者においては活性化の度合いを制御するものとして時間が関与するのに対し、後者では、保存そのものは権利上不定の期間長に及び、時間は想起対象の過去への定位に関与する（後述）。手続き記憶の場合は、今度は記憶の起点が過去のある時点ではなく、通常（それ自体が複数の時期に散らばる）複数回の反復動作であり、そこから一つの運動パターン記憶が構築されるとい

う「多対一」の関係になる。エピソード記憶と同じく保存は不定の期間長に及び、かつ過去への定位もそれ自体ではなされない（エピソード記憶に頼る）。意味記憶はそれ自体分類概念として脆弱であり、さらなる分析を要求するように思われる。いずれにせよ、必ずしも整合的とは言えない現行の分類を、このような時間的構造の観点から構成的に検討し直すことは、一つの有益な作業でありうる。

記憶によって問題を立て直すことは、**多元的な時間的構成**という観点から人間および生物の振る舞いを検討するアプローチを可能にする。一口に記憶と言っても、過去から現在に及ぶ時間の関わり方は多元的である。言い換えれば、時点の継起ないし累積という一元的な時間形式のもとでは、人間の知覚-思考-行動を適切に解明できない。ある時点の人間は、過去の多様な時点ないし時期へと多数の根を下ろしており、潜伏や反復などの多様な時間的変形を介してつながっている。

記憶という枠組みは、事象の複雑性を保持したまま、非還元的・立体的・拡張自然主義的な理解を作るための道を開いてくれる可能性を持つのである。

2. 過去性とその内発性

さて、以上の方法的提案を踏まえた上で、あらためてエピソード記憶の固有性に話を戻そう。意味記憶、手続き記憶、プライミングといった他の長期記憶と異なり、エピソード記憶だけが、自らが再現する記憶が過去に属するものであることを理解する。あらゆる記憶の諸形態の中で、エピソード記憶だけが「過去性 pastness」の認識を伴っているのである。

過去性は同時に、別な文脈下でも、エピソード記憶の識別的特徴として機能する。他のイメージ関連能力との差別化である。エピソード記憶は通常心的イメージの操作を伴う。だが心的イメージはより広い適用を持つ。一般的な意味での想像（タイプのなオブジェクトやイベント）におい

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

でも用いられるし、より限定してエピソード（イベントトークン）的なものに限ったとしても「エピソード未来思考 Episodic Future Thought (EFT)」や「エピソード仮想思考 Episodic Counterfactual Thought (ECT)」もまたエピソード想起と同様、イメージの操作を伴う。だが、こうしたあらゆるイメージ操作の諸形態の中でも、エピソード記憶だけが過去性の認識を伴っている⁴⁾。

本稿で取り上げたい記憶の哲学的問題がそこにある。それは、過去というものの認識的起源の問題である。なお、Michaelian & Sutton 2017 は、イメージ機能全般とエピソード記憶を分かち要素の名称として、「想起性／ムネメ性 *mnemicity*」を提案している。この語は記憶の哲学の文脈では、ゼーモンが利用し、ラッセルが『心の分析』で取り上げて有名になったものである。だが我々としては、時間とのつながりをより可視的にするという理由（および、5 節で述べる時期特定性と親和性という理由）から、本稿は「過去性」という名称を用いることとする。

過去内発性原理

まず、過去性の問題が、記憶にとってどのように重要であるかを、確認しておこう。

19 世紀の冒頭に活躍した哲学者メヌ・ド・ピランは、現代では、記憶の下位分類を行なった先駆者として高く評価されている（Schacter 1987, Polster et al. 1991）。彼は、表象的 *représentative* / 感覚的 *sensitive* / 機械的 *mécanique* 記憶の分類（1802）や、人格的 / 様態的 / 対象的「レミニセンス *réminiscence*」⁵⁾ の区別（1811–1822）において極めて先駆的な仕事をしており、現代記憶理論の代表的な論者の一人である Schacter は、「彼のアイデアは、多くの点で驚くほどモダンな響きを持っている」（Schacter & Tulving 1994, 5）と評している。第一部で論じたような記憶分類の哲学的再構成というプロジェクトにとっては、紛れもなく貴重なリソースであるが、本節

で注目したいのは別な論点である。

以下のあまり注目されない一節には、過去性についてメヌ・ド・ビランの本質的な洞察が伺える。

仮に、印象が器官や脳に痕跡を残し、それが暗示されたり、互いに呼び起こされたりする様子を生理学的に説明することができたとしても、自我がどのようにして自らを認識し、更新されたイメージや印象に対してどのようにして過去という観念 *l'idée du passé* を結びつけることができるのかを説明することはできないだろう。ここにあるのは内奥感官ないし反省の事実であって、これを生理学の法則によって説明しようとするのは、生理学の事実を通常の力学の法則で説明するよりも、輪をかけて困難なものである。比較しようとする2つの事実次元・観念次元の間には、絶対的な異質性がある。ハートリー、ボネ、コンディヤックは、この異質性を十分に感じ取っていなかった（強調引用者、Maine de Biran 1811–1822, 325）

ここでメヌ・ド・ビランは、記憶の働きを「外から」生理学的に説明することによっては説明されない要素として、「過去という観念」を取り上げている。なお、彼がこれと並んで取り上げている自己性もまた、現代では、エピソード記憶において重要な地位を確立している⁶⁾。このテキストの核心的な洞察は、以下である。すなわち、他個体の記憶現象を我々は外から観察し説明することができるが、それが過去に関わるという理解成分は、自分自身の想起経験からしか取り出すことができないということである。これを「過去内発性原理 Past Endogeneity Principle: PEP」と呼ぶことにしよう。

次に、この同じ論点について実には示唆に富む発展的記述を引用する。19世紀末に極めて多くの著者たちによって参照されていた生理学・心理学者

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

テオデュール・リボーからのものである。そこで彼は、記憶が「それ自身において／即自的に」成り立つ条件と、「それ自身にとって／対自的に」成り立つ条件を区別する⁷⁾。心理学的な意味での記憶が後者にかかわり、当時注目され始め、そして彼自身が推進しようとしていた生物学的な意味での記憶が前者にかかわる。

[...] 語の通常の意味において、記憶は以下の三つを包含している。〔①〕ある状態の保存 (conservation), 〔②〕その再生 (reproduction), 〔③〕過去への定位 (localisation dans le passé) である。しかしながらそれはある特定の種類の記憶、つまり完全な parfait 記憶と呼ばれうるものの話である。[...] 第三の要素は [...], 記憶を完全なものにしてくれる要素ではあるが、記憶を構成するものではない。前二者を取り除けば、記憶は消滅してしまう。だが最後のものを取り除けば、記憶はそれ自身にとっては pour elle-même 存在しなくなるとしても、それ自体においては en elle-même 存在し続ける。この第三の要素は、もっぱら心理学的なものであり、前二者に対して付加的なものとしてわれわれに現れる。[...] それが表しているのは、記憶事象のうちに意識が持ち込んできたものであって、それ以上のものではない (番号の追加は引用者による, Ribot 1880, 536)。

保存と再生という初めの二つの条件を満たせば、「それ自体において」記憶と呼べる。しかし、その再生されたものがその再生者である生物にとって過去として現れるかどうかはまた別な話である。それをリボーは、「それ自身にとって」記憶であることと呼んだ。現代のエピソード記憶に相当するものである。そしてそれには「過去への定位」という追加の要件があるとしたのである。過去の情報が保存されていることは、それが過去として認識されていることを含意しない。ジェイムズ流にいうなら、後者

は「追加の事実」なのである⁸⁾。

過去性の外的帰属と内的帰属

これを過去内発性原理の文脈においてみれば、興味深い洞察に導かれる。引用テキストが示しているのは、言い方を変えれば、過去性の外的帰属と内的帰属の区別である。生物一般の記憶が「完全」と言われないのは、その過去性を、外から帰属してもらう必要があるからである。過去性が想起に内発的にしか得られないとすれば、外的帰属は、結局、どこかで内的帰属を要求することになる。存在と認識という対比から想像されるのとは裏腹に、むしろ心理的記憶なしに生物学的記憶はないわけである。というのも、観察者が「即自的」なものとしての生物の記憶を説明するに際して、それが記憶であること、つまり「過去」に関わるという理解そのものは、観察者自身の記憶から持ち込んでいるのだから、こうした帰結は、これをリポー自身がどこまで意図していたかは定かではないにせよ、リポーの区別から一定の道理をもって導かれる。

このことは「それ自体における記憶」の「それ自体」性について、我々を以下のような反省へと導く。神のような超越的観察者を導入しない限り、何か「それ自体において」過去であると我々が述べるときにそれが依拠しているのは、事実上は上記の区別、つまり「過去への定位」を実装しているのが当該生物自身であるか、それとも同じ宇宙の別な存在であるかの区別に帰着する。この場合、仮定によってこの「別な存在」は「それ自身にとって」記憶を有する、つまり内発的に過去に言及する。そうでなければ後退するだけだからである。心理学にとどまっていた記憶研究の裾野を生物学まで広げようというリポー自身の意図・関心にとってはこのことは問題にならなかっただろう。この「別な存在」として人間がいることは前提だからである。しかし、より巨視的な時間スケールにおいて過去性の起源を考えると我々の文脈においては、話が違ってくる。というの

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

も、過去への内在的な言及を含む記憶、リポーが完全な／対自的な記憶と呼ぶ記憶こそが、他の生物の記憶、ひいては宇宙の時間そのものに責任を負うことになるからである。

念のため述べておけば、これは観念論的な主張ではない。宇宙の過去を、エピソード記憶を持つ観察者のうちに封じ込めるという話ではないからである。存在論的記述を否定しているどころか、むしろ内在的帰属を果たす存在者を存在論の中にカウントして、それが宇宙の中に一員として含まれているのでない限り、過去を持つ宇宙にならないと述べているのである。

メーヌ・ド・ピランとリポーに共通しているのは、「記憶が過去にかかわる」という一般的な定式化では、潰れてしまう重要な区別があるということだ。過去から何かを受け取るだけでなく⁹⁾、その受け取った何かを過去だと理解できるということ、これが我々の記憶を特徴づけている。過去に定位するという作業は、過去というものの存在をそもそも思いつくことができている存在にとってしか意味がない。「過去という観念」が必要だ。では、肝心のその「過去という観念」は、一体想起プロセスのどの要素に起因するのか。

3. 問いの定式化：過去性のユニバーサルな起源

具体的な候補の検討に移る前に、我々の問いを明確化しておこう。ここで論じようとしている過去性の起源というのは、個体発生のどの段階でこれを扱えるようになるかという発達レベルの話ではないし、単純に心の中だけの話でもない。過去性というものが生物ないし宇宙の歴史全体の中でどのようにして登場したか、という議論である。

例えば、一般に子供が何か新しい概念を学ぶときには、それを親や教師など共同体の他のメンバーから学ぶことができる。だから、「過去とはどういうものか」「想起と想像はどのように区別されるべきか」といった事

柄は、社会的な教育実践の場面で学ぶことができるように思われるかもしれない。例えば Mahr らは、実証的な知見に基づき、ムネメ性が実在性モニタリングというメタ認知機能に属し、これが単に生物学的なプロセスではなく、社会的・文化的な学習の産物である可能性を示唆している (Mahr, J. B. et al. 2023)。

だが、こうした議論は、ユニバーサルな起源を求めようとする我々の問いにとっては十分な回答を与えるものではない。結局、親や教師はどこから学んだかという問いへと遡行することになるだけだからである。理論的には、どこかで生物は、自ら過去性を獲得しなければならない。それはどのようにしてか。この問いに、教育は答えてくれないのである。

メモや記録に訴えて過去性を発見するというシナリオも、原理的な困難を抱えている。意図的にか偶然にか形成された物理的痕跡によって、生物が過去性を知ることは期待できない。意図的に痕跡を残せるためには、すでに過去性を理解できていなければならないし、偶然に形成された痕跡を痕跡として認めるためには、すでに過去性を理解できていなければならないからである。

他の長期記憶カテゴリーに訴えて、過去性を獲得することができるだろうか。例えば、意味記憶や手続き記憶を用いて、エピソード記憶の過去性を保証するという道筋である (Smith & Dyke 2022)。あいにくこれも難しい。というのも、上の外的帰属と内的帰属の議論で見届けた通り、意味記憶や手続き記憶を記憶として認定できるのは、エピソード記憶があるためだからである。

最後に、過去という概念が純粹に構成的であるとする立場もとらない。ここで私は、経験的な源泉を一切持たない純粹に構成的な概念から、逆に構成的な側面を一切持たない純粹に現象的な概念までのスペクトラムを念頭に置いている。確かに我々は、例えばある種の数学的概念のように、生物学的な経験から離脱した（ように少なくとも見える）概念を構成的に定

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

義して使用することができる。そのような構成的概念も、さまざまな使用の文脈が展開されていくうちに、その現象的な側面が経験されるようにはなりうるだろう。しかし、「過去」が起源においてそのような概念であったと考えることは難しい。その理由の一つは、その場合、過去についての真理性や記憶の認識論的正当化が実在の時間に根拠を持たないことになるからである。

逆に、我々は過去性が完全に個人の経験だけから構成されるとまで仮定することもしない。Mahrらの指摘する通り、他の現象性のなかから「過去感（過去性の感じ *feeling of pastness* : FOP）」をそれとして選択的に検出できるように社会的教育が機能することは十分にありうる。しかし、重要なのは、そのFOPが経験のうちに実在的な場所を持つということである。

以上の予備的考察から、「我々が過去を獲得するのは想起経験そのものから」という、上述の「過去内発性原理」が残る。大森荘蔵が述べるように、想起は「過去の定義的経験」（大森荘蔵 1992, 40）なのである。

4. 過去性の出自

それでは具体的な候補の検討に移ろう。

過去性にかんする既存の立場から、以下の四つを取り上げる。1) 一階の内容（想起されるイベントの中身）に基礎付ける古典的立場（テーヌ）、2) 一階の内容に加えてメタ的な情報が組み込まれるとする「メタ表象主義」の立場（Perner 2001, Redshaw 2014, Mahr & Csibra 2018）、3) 内容に基づく感受的性質とする「内容の経験」説（Fernández 2006, 2017）、4) メタ認知に基づく感受的性質とする立場（Dokic 2014, Perrin, Michaelian & Sant'Anna 2020）である。後二者は、現象的な「感じ *feeling*」に訴える点で前二者と異なる。

1) リポアの時代に想定されていた「過去への定位」の標準的な説明として、当時広範な影響力を持っていた哲学者イポリット・テーヌの記述を

見ておこう。

当時私はこのイメージを過去の特定の場所に位置付けていたのだが、もうそれを位置付けるディテールを失ってしまった。今となっては、どれだけ頑張ってもそれを私の過去の全線上をスライドさせようともし、相継起するどの環にも引っかかってくれない。それは摩耗し、鈍磨してしまった¹⁰⁾。

ここでは、ある想起されたイメージの過去への定位は、当該イメージの内容、その「状況的 *circunstancié*」な「ディテール *détails*」に基づいて判断されると考えられている。

しかし、過去性のユニバーサルな起源という観点からは、この立場は満足がいかない。というのもこの立場は系列的時間を前提としているが、過去性の体験こそが系列時間の作成を動機づけるのであって逆ではないと考えられるからである。

2) メタ表象主義の立場については、Perrin & Sant'Anna 2022 による批判を掲げるにとどめよう。「メタ表象主義は、過去性の特徴である感受的 *affective* な側面、つまり、エピソード的に想起するとき、人は単にその出来事が過去であると知っているのではなく、むしろそれを過去であると経験したり感じたりしているということを説明できない」(2022, 4)。

3) Fernández の立場と 4) Perrin らの立場の違いは、やや詳しい説明を必要とする。先述の通り、両者はいずれも感受的側面、つまり経験の直接的な現象性の側面を重視している。エピソード想起経験の現象性には、二つの要素がある。一つは想起される出来事の内容に関わるもので、これを「イメージの現象性 *imagistic phenomenology*」と呼ぶ。他方、このイメージ的現象性に結び付けられた現象性を「感じ現象性 *feeling phenomenology*」と呼ぶ。エピソード想起の「感じ現象性」に属するものとして、「過去性」の

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

他に「自己性」, 「因果性」, 「特異性」が挙げられている (Perrin, Michaelian, & Sant'Anna 2020, 4)¹¹⁾. ここまでは両立場は概ね共通している. 異なるのは, Fernández がどちらの現象性も志向的・表象的特性であると考ええるのに対し (このため志向説 intentionalism と呼ばれる), Perrin らはイメージ的現象性についてはそうだが, 「感じ現象性に関する限り, [...] 過去性の感覚は, エピソード記憶の内容に依存しているのではなく, むしろ心的状態の手続きの特徴を検出し解釈する, 内容に左右されないサブパーソナルなプロセスの作動に依存していると見なされる」 (Perrin and Sant'Anna 2022, 6). これは具体的には, エピソード想起を行なっているメカニズムに対するプロセスモニタリングの介在を述べている.

プロセスモニタリングという考え方は, ミカエリアンのシミュレーション主義においても重要な役目を果たす道具立てである. ポイントは, 個別的な想起内容ではなく, 想起というタイプのプロセスがうまく作動しているかをモニタリングする機構がわれわれのうちに存在しており, 想起と想像の識別はこの機構に基づいているという点である. Perrin らの提唱する立場は, 想起内容に関わるイメージ現象性とは異なり, 過去感という感じ現象性は, このメタ認知的特性に依拠しているとする¹²⁾.

過去性がエピソード想起以外からくる可能性

この立場の批判的検討に入る前に, 他の「感じ現象性」に触れておく. ユニバーサルな起源からの発生論を構想する観点からは, エピソード想起だけに突出した過去性を認めることは, 深刻なブートストラップ問題——神秘的な断絶——に直面するからである. ここでも一節で提起したエピソード記憶の相対化は効いてくる.

エピソード想起の場面を離れば, 「感じ現象性」で, 「過去感 (FOP)」以外に, 過去に関係しそうなものは他にも挙げることができる. ラッセルが『心の分析』 (Russell 1921) の中で検討しているのは, 「馴染み familiarity」

の感じ、「再認 recognition」の感じ、「想起 remembering, recollection」の感じの三つである。第三のものが過去性／想起性であるので、前二者について見ておこう。

「馴染み感 feeling of familiarity (FOF)」とは、過去に何度も見聞きした対象について抱かれる感じ現象性である。だがこれは過去の知にとって必要でも十分でもない。なぜなら、過去でありながら馴染みの感じを抱かない場合があり、馴染みの感じを抱きながら対応する過去の体験がない場合があるからである。前者は、一度だけ見た対象の場合、つまりエピソード想起ないしエピソード的なオブジェクト想起の場合である。後者の事例としては、類似物のケースがある。Kind は、馴染みの感じが必ずしも当該対象の過去における反復的経験を要求しない例として、親と慣れ親しんだ人物がよく似た息子に初対面で会った場合や、実家と同じレイアウトの家屋に初めて入った場合に感じられる馴染み感を挙げている (Kind 2022)¹³⁾。

かくして、馴染みの感じは、過去の観念をもたらさない。ラッセルの言はこうである。「馴染みのものが以前に経験されたものだという判断は反省の所産であり、馴染みの感じの一部ではない。[...] 過去に関するいかなる知識も、馴染みの感じ単独からは派生するべくもない」(169 [199])。

「再認感 feeling of recognition」について、ラッセルはこれをさらに二つに区分している。彼によれば、一つ目の再認感が「馴染み感」と異なるのは、そこにおいて「単に見慣れた感じがするというだけでなく、それがしかじか such-and-such であるということを知る」(Russell 1921, 169 [200]) 点においてである (例えば猫を見て猫とわかる)。だが、第二の意味での再認は、これを超えている。そこでは、単に猫を見て猫とわかるのではなく、「以前にそれを見たことがあるということを知る」(強調引用者, *ibid.*)。議論の便宜のため、ここでは第一の再認を「単純再認感」、第二の再認を「既視再認感」と呼ぶことにしよう。

この既視再認感は、すでにある意味での記憶を含む。だがラッセルは続

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

けてこう論じる。しかしそれは、ただ「以前に起こったことと類似しているという知識を含む」だけであり、「ある確定した過去の出来事のある確定した記憶 a definite memory of a definite past event」を含むものではない。その点でエピソード想起（知覚連想的なそれを含む）とは異なっている、と。

ラッセルが切り出したこの既視再認感は、実に絶妙なところを拾い上げている。これは、知覚をきっかけとした、それゆえ知覚に対して事後的な連想としての想起ではない。だが、単純に知覚埋没的な再認（単純再認感）でもない。猫を猫として再認し、その再認の現場にとどまりながらも、だが同時に、以前に（つまり不定の過去に）それを見たことがあるという感じを抱いている、そういう中間的な「感じ現象性」を取り出しているのである。そして、ここには明白に、過去性（の少なくともいくばくか）が含まれている。要するに、ラッセルはここで、（既視再認感に現れる）一般的な過去感と（エピソード想起に現れる）時期特定的な過去感の区別を導入していることになる。この区別を、われわれは次節の議論で援用することになる。

5. メタ認知説の検討

Perrin, Michaelian, & Sant’Anna 2020 の提唱する過去感のメタ認知説の検討に入る。我々は、多くの点で優れたこの見解に以下の二つの点で不満を抱いている。第一のものから見ていこう。

すでに見たように、彼らは一方で Fernández の内容への依存とは異なる立場を取りつつも、他方で Dokic のような極端な分離主義（注 12）を避け、「穏健な反分離主義 Moderate Anti-separatism」を採る。彼らは、過去感に「トークン内容に対する感受性 token-content sensitivity」を否定しつつ、「内容の心的タイプ（例えば知覚的、想像的、想起的といったタイプ）に対する感受性 sensitivity to the mental type—e.g., perceptual, imaginary, or mnemonic type—of the content」を認めるのである。だがこれは、以下に述べる理由か

ら、過去性というより想起性の感じとして特徴づけられるべきものではないだろうか。

先述の通り、彼らの解釈は、何かを想起する際に、知覚でも想像でもなく想起のプロセスが適切に発動しているかを監視するプロセスに依拠している。それゆえ、彼らの解釈の元での「過去感」は、想起というタイプのプロセスが発動していることを告知知らせはするが、思い出そうとしている出来事がいつ頃の過去であるのか——つい五分前のことなのか、二ヶ月前のことなのか、十年前のことなのか——についてまったく無差別的である。だが、まさに想起プロセスのただなかにおいて、我々は漠然としたものであれ、これから想起されるべき対象の時間的領域についてある種の「感じ」に基づいて「過去への定位」を探っているのではないだろうか。単に「過去一般」に関与していることからくる——ラッセルの既視再認でも持ちうるような種類の——一般的な過去感と、特定の時点とまでは言わないまでも、特定の時期への方向性を告知知らせるような種類の、より特殊な過去感が区別されるべきだろう。そして、Perrin らの説は、前者しか説明しないように思われるのである。

平井・原・ペラン（2022）において平井は、バルクソンの記憶理論のうちに、二種類の過去性を区別し、現在から過去一般への離脱に存するものを「ドローバック過去性」、続く具体的な想起探索プロセスに伴うものを「トラベルバック過去性」と呼んだ。バルクソンは『物質と記憶』のある一節で、過去性について、プロセスモニタリングを思わせる記述を与えている。

本質的に潜在的なものである過去は、それがわれわれに過去として把握されるためには、過去が現在のイメージへと展開しつつ暗闇から白日のもとに現れてくるその運動を、われわれが身をもってたどるしかないのだ。（Bergson 1896, 150 [198]）

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

だが、よく見るとベルクソンの想起プロセスは、第一に「潜在的」な「過去一般」へと身を移すステージ、第二に「過去の一定の領域に身を置き直す」という時間内定位ステージ、第三に記憶の「現実化」を果たすステージという風に分節化されている (Bergson 1896 148 [196])。第一ステージにおける過去性はまだ一般的・タイプのである¹⁴⁾が、第二ステージにおいては徐々に過去の領域は限定されていく。つまり、想起というのは、必ずしも単に過去一般に移動すればただちに定位が完了するというわけではなく、過去の領野の中を何らかの手がかりをもとに探索する場合がある。こうした探索的定位のプロセスをナビゲートしうる要素として、ベルクソンはコレージュ・ド・フランス講義において「時間的色合い」を導入している。これはまさに (出来事の内容に由来する)「イメージ的現象性」に付加される「感じ現象性」であり、かつ、想起に含まれる時間内定位プロセスに内在的な「過去感」である点で、驚くほど Perrin らの立場と一致している。しかし、彼らと袂を分つのは、それがより特定された過去への感受性を示すという点である。

記憶は、それが定位可能なもの localisable であるなら、通常それに固有の徴しをもっています。それが属している時期の徴しのようなものです。この徴しは、言葉では表現できない、いわく言い難いものですが、誰もが感じているものです。私たちの人生のさまざまな時期は、それぞれが特別な色合いとニュアンスを伴っており、私たちには異なって見えます (Bergson 2018, 32 [37])

一方で、一般的な過去感を否定するわけではない。だが他方で、ベルクソンは、過去への探索的定位プロセスを考慮に入れ、(時点とまで言わずとも)より限定された時期を識別的に示唆することで、探索を導くという新たな機能を過去感に帰している。その意味で、いずれの過去感も、想起

プロセスのただなかにおいて参照されていると言えるだろう。

ラッセルおよびベルクソンの考えから導かれるのは、過去感のうちに一般性と時期特性性の区別を設け、前者によりエピソード想起のブートストラップ問題（4 節）を緩和させ、後者により、より限定された内容感受性を認める余地を持たせるという構想である。その際、FOP の構成要素のうちに、「探索的な時間内定位」におけるナビゲーション機能を含める点に、固有の論点が見出された。

第二の不満点は、時間観念に関わる。Perrin, Michaelian, & Sant'Anna 2020 は、過去感 FOP に固有のものとして、何度も系列的時間に言及している。それは「単線的で連続的で不可逆的な時間」（2020, 11）であり、「FOP に適切な、視点的で特異性を付与された時間の概念」（2020, 12）であると言われる。確かに、彼らはこうした時間が突然与えられるのではなく、自己性や因果性に「発達的に依存」していることを論じるのだが、結局今度は自己性や因果性の方に系列的な時間（unique series, line of time）を帰すことになる。

これに対し、我々の観点からは、そもそも系列的時間表象はそれ自体、大量の想起体験を前提とするように思われる。ユニバーサルな起源を探るといふ我々のシナリオのもとでは、自己性であれ、因果性であれ、過去性であれ、原初的な「感じ現象性」にそこまで高度な構成性を強いるのは不釣り合いに思われる。系列的時間を構成する「諸時点」を得ることができるのは、多数回のエピソード想起試行を経たのことだからである。それゆえ、成熟した段階である個体の過去感が系列的時間概念を含みうることを否定しないにせよ、それを初めから所与とみなすことは難しい。系列時間は、明確に、構成的成分の濃厚な概念なのである。

代替する説明は、前系列的という意味で原初的な「感じ現象性」から、時間系列を構成するに至るシナリオを提供するものであることが望ましい。これについては記憶の大規模構造、記憶全体のダイナミクスを適切に

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

記述できるようなモデルの構築，時制時間論と補完的關係に立つアスペクト時間論の整備など，多くの準備が必要となり本稿の射程を超える。

結論

本稿の目的は二重であった。第一に，記憶を単なる専門分野としてではなく，人間現象における哲学的問題を再文脈化するための枠組みとして捉えることを提案した。存在論と認識論が互いに入れ子状に噛み合わさり，自己性も関与してくる記憶の問題においては，神経科学や心理学といった経験科学と哲学による概念的検証とが相互に支え合うことがとりわけ重要である。概念的に未発達な現行の記憶分類を，より構造的に堅固な仕方で再組織化するなかで，双方向的に新たな洞察を得ることが望まれる。

第二に，上述の方法論的ヴィジョンの実践例として，過去性の問題を取り上げた。哲学的伝統から「過去内発性原理」を取り出すことで，過去性のユニバーサルな起源の問いを定式化した。この問いの見地から，現代の記憶哲学において近年有力な立場となりつつあるメタ認知説を批判的に検討し，二種類の過去性の区別および時間哲学との接続の必要性を示した。以上の考察を通じて，記憶哲学の真摯な課題と豊かな可能性の一端を示し得ていれば幸いである。

註

- 1) ただし，当時 Schacter らが仮定していた複数システムの機能的乖離は支持し難いというスープレナントの指摘は我々も共有している。むしろその点にこそ，諸記憶間の相互連関の概念的掘り下げの余地があるわけである。
- 2) Thompson-Schill, Kurtz, & Gabrieli 1998 は，単に単語的に近接ないし共起するという「連合的連関 associative relatedness」（例えば針と糸，蜘蛛と網）と「意味的連関 semantic relatedness」（例えば鯨と海豚，家鴨と鶏）を区別し，後者の方がプライミングの必要十分条件であることを示している。
- 3) 上述の第二と第三の論点に，ベルクソンの「注意的再認」（『物質と記憶』）の理論は整合的である。
- 4) オブジェクトの記憶が過去性をもつとする場合（Openshaw 2022），それがエピソード

ソード記憶と隠れた関係を持っていないかは、なお探求される余地があると思われる。

- 5) この語はコンディヤックに由来するものであるが、訳者である古茂田が注意喚起するように、文脈上特異な用法であるので注意が必要である（邦訳上巻 263 頁）。言葉そのものは「想起」と訳しうるが、実際には、むしろ「再認」のことを指す。
- 6) そもそも現代心理学におけるエピソード記憶概念を提起した Tulving 1972 自身が、それを可能にする要素として、「クロネステジア *chronesthesia*」に並び「オートノエシス *autonoesis*」を挙げ、前者が時間に関わり、後者が自己性に関わるとしている。Fernández 2006 もまた、過去性と自己性を取り上げ、記憶された出来事が過去に起こったという信念（過去性の帰属）と、記憶された出来事が起こった時に自分が存在していたという信念（存在の帰属）の 2 つの特徴に焦点を当てている。
- 7) もちろんヘーゲルにおける意味とは異なる。
- 8) ジェイムズは時間知覚の文脈で、心理学的な「見かけの現在」のなかで、「感じの継起が、それ自身において勝手に継起の感じとなるわけではない。[...] それは追加の事実として扱われねばならない」と書いた。James, W. 1981 (1890), 591
- 9) シミュレーション主義は「過去から何かを受け取る」ということを記憶の必要条件としない点でリポーよりもラディカルである。だがいずれにしても、本稿の主題である「過去と認める」ことがどのようにして可能になるのかは被説明項として残ると思われる。
- 10) Taine, H. *De l'intelligence*, éd. 6 1892, t 2, 58–59.
- 11) Perrin & Sant'Anna 2022 では「所有感 *feeling of ownership*」や「過去への因果的繋がり感 *feeling of causal connectedness to the past*」が挙げられている（2022, 5）。
- 12) ただし、Perrin らは、Dokic 2012 と異なり、メタ認知特性が内容から完全に独立であるとは考えない点で、「分離主義 *separatism*」をとらない。
- 13) ラッセルは記憶イメージの精確さ（*accuracy*）がこの馴染みの感じに基づいていると考えている。おそらくはベルクソンの「純粋記憶」を念頭に置きつつ、記憶イメージの真理性を吟味できるのは、「（何らかの非イメージ的記憶 *some imageless memory*）」との比較によるのではなく）馴染みの有無によってだと述べる。その際、ラッセルは精確 *accuracy* と精密 *precision* を使い分けている。「記憶が精確であるのは、それを検証するであろう事例が狭く状況づけられている場合である。[...] 記憶が精確であるのは、それが精密 *precise* かつ真 *true* である場合である」（AM 182 [215]）。
- 14) ベルクソンにおいては環境との相互作用に直結する知覚行動と、そこからの一時的な離脱を要求する想像や想起との間にタイプのな区別があり、Perrin らの

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

区別とは一致しない。また、このドローバック過去性は、時制というよりはアスペクトの移行に対応している。平井 2022, 2023 を参照。

文 献

- Bergson, H. (1896) *Matière et mémoire*, PUF (『物質と記憶』(杉山直樹訳) 講談社学術文庫, 2019 年)
- Bergson, H. (2018) *Histoire des théories de la mémoire. Cours au Collège de France 1903–1904*, édité par Arnaud François, PUF (『記憶理論の歴史 コレージュ・ド・フランス講義 1903–1904 年度』(藤田尚志・天野恵美理・岡嶋隆佑・木山裕登との共訳) 書肆心水, 2023 年)
- コンディヤック『人間認識起源論(上)』(古茂田宏訳) 岩波文庫, 1994 年。
- Dokic, J. (2014). Feeling the past: a two-tiered account of episodic memory. *Rev. Philos. Psychol.* 5, 413–426. doi: 10.1007/s13164-014-0183-6
- Fernández, J. (2006). The intentionality of memory. *Austral. J. Philos.* 84, 39–57.
- Fernández, J. (2017). “The intentional objects of memory,” in *The Routledge Handbook of Philosophy of Memory*, eds S. Bernecker and K. Michaelian (New York: Routledge), 88–99. doi: 10.4324/9781315687315-8
- Fernández, J. (2019). *Memory: A self-referential account*. New York: Oxford University Press.
- 平井靖史, 原健一, ドニ・ベラン (2022) 「デジャヴュと記憶——ベルクソンと現代記憶哲学」『人文論叢』(福岡大学人文学部) 第 53 巻第 4 号, 1075–1115 頁。
- 平井靖史 (2022) 『世界は時間でできている ベルクソン時間哲学入門』青土社。
- 平井靖史 (2024) 「時間とは何か? ——スケールとアスペクト時間論」『現代思想 特集: ビッグクエスチョン』52(1), 青土社。

- James, W. (1981, originally 1890). *The Principles of Psychology*. vol. 1. Harvard University Press.
- Kenett, Y. N., Anaki, D., & Faust, M. (2014). Investigating the structure of semantic networks in low and high creative persons. *Frontiers in Human Neuroscience*, (8): 407–407.
- Kind, Amy (2022). The Feeling of Familiarity. *Acta Scientiarum* 43 (3):1–10.
- Mahr, J. B., & Csibra, G. (2018). Why do we remember? The communicative function of episodic memory. *Behavioral and Brain Sciences*, 41: 1–16.
- Mahr, J. B. et al. (2023). Mnemicity: A Cognitive Gadget? *Perspectives on Psychological Science*. [Online] 18 (5), 17456916221141352–1177.
- Maine de Biran (1811–1822). *Essai sur les fondements de la psychologie* (Tisserand ed.) Œuvres IX.
- Michaelian, Kourken & Sutton, John (2017). Memory. *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- 大森莊藏 (1992) 『時間と自我』 青土社.
- Openshaw, J. (2022). Remembering objects. *Philosophers' Imprint* 22(11): 1–20.
- Perner, J. (2001). Episodic Memory: Essential Distinctions and Developmental Implications. In K. Lemmon, & C. Moore (Eds.), *The Self in Time – Developmental Perspectives* (pp. 181–202). Londres, Lawrence Erlbaum
- Perrin D, Michaelian K and Sant'Anna A (2020). The Phenomenology of Remembering Is an Epistemic Feeling. *Front. Psychol.* 11:1531.
- Perrin, D., Sant'Anna, A. (2022). Episodic memory and the feeling of pastness: from intentionalism to metacognition. *Synthese* 200, (2): 1–26.
- Polster, Michael R., Lynn Nadel, and Daniel L. Schacter (1991). Cognitive neuroscience analyses of memory: A historical perspective. *Journal of Cognitive Neuroscience* 3(2): 95–116.
- Redshaw, J. (2014). Does metarepresentation make human mental time

記憶はなぜ哲学の問題になるのか

travel unique? *Wiley Interdiscip. Rev. Cogn. Sci.* 5: 519–531. doi:
10.1002/wcs.1308

Ribot, Th. (1880). ‘La mémoire comme fait biologique,’ *Revue Philosophique* 9,
516–47.

Schacter, D. L. (1987). Implicit memory: History and current status. *Journal of
Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition*, 13: 501–518.

Schacter, D. L., & Tulving, E. (Eds.). (1994). *Memory systems 1994*. The MIT
Press.

Smith, T., Dyke, H. (2022). ‘A Refutation of Memory Circularity’. *Erkenntnis*,
87(5): 2067–2080.

Taine, H. (1892). *De l’intelligence*, éd. 6, t 2., Hachette.

Tulving, E. (1972). Episodic and semantic memory. In E. Tulving & W. Donaldson
(Eds.), *Organisation of memory* (pp. 381–403). Academic Press.